

「鞍馬天狗」を歩く

廣田 幸稔

能には源義経が登場する曲が多くあります。「橋弁慶」「烏帽子折」「安宅」「船弁慶」等ですが、義経が成人したのち源平合戦を主題にした曲でも、義経の役は子方が演じます。

一方、桜が舞台となる曲も「嵐山」「右近」「熊野」「西行桜」「桜川」等これも多く演じられてきました。中でも「鞍馬天狗」は、義経が登場し、鞍馬山の花見の曲です。稚児役の子方が何人も舞台上に並ぶことで、小さなお子さんの姿が舞台上に華やきを加えます。能の子方は「鞍馬天狗」の花見の稚児役で初舞台を踏むことが多く、鞍馬山を下りた義経が成人の儀式を迎える「烏帽子折」の曲で子方を卒業します。能に限って言えば、子方は義経役で舞台を踏み、経験を重ねて大きくなるといつても過言でない気がします。

能「鞍馬天狗」は子方・義経と春爛漫の鞍馬寺の桜の花見という二大要素に加え、大天狗を後ろ盾にした義経の打倒平家の兵法修行という魅力的な題材を盛り込んだ人気曲です。

鞍馬山（京都市左京区）は京都市内を流れる鴨川と高野川の合流地点・糺森東側にある叡山電車出町柳駅から終点鞍馬駅まで30分。駅前では大天狗の大きなお面が私たちを迎えてくれます。鞍馬駅からは鞍馬山山門はすぐ目の前、徒歩2分ほどです。叡山電鉄沿線には鞍馬貴船の観光地やいくつかの大学もあり、京都を訪れる観光客や地元京都市民にとってもお馴染みの路線です。個性的な車両が多いなか、岩手県三陸鉄

道仕様の車両（期間限定）もあります。さて、今回のルートは、鞍馬山山門を出発地点にして、義経が7歳から10年間住んでいたという「東光坊跡」を経て、桜が満開の「本殿金堂」、兵法修行のため奥の院に向かう途中で喉を潤したという「息つぎの水」や「背くらべの石」「木の根道」、大天狗がいたという「僧正が谷不動堂」から山を下って貴船口をゴールにしました。春の景色を楽しみながら鞍馬山登山約1時間のコースです。

平治の乱で源義朝を討ち取った平清盛が、義朝の遺児（今若・乙若・牛若）に対して、仏門に入ることを条件に義朝の愛妾常盤御前の命乞いに応えた話は有名です。義経は幼名牛若、鞍馬山では禅林坊阿闍梨寛日の弟子となつて遮那王と名を改めます。その義経が預けられた鞍馬寺は、比叡山と並び、勇猛果敢な僧兵の拠点としても知られており、毘沙門天を祀る寺でもあります。また、都から遠く離れた洛北の地であり、丹波を抜けて日本海まで通じる鞍馬街道は交通の要所です。幼いとはいえ、なぜそんな寺に身を置くことができたのでしょうか。また、十六歳になった義経は鞍馬を出奔し葉王峠を越え、藤原秀衡をたよつて奥州平泉に向かいますが、義経の母・常盤御前が再婚した藤原長成の身内には、藤原秀衡に娘を嫁がせた元陸奥守・藤原元成という奥州とは所縁の人物がいることから、常盤が義経のために動いたのではないかという説もあるそうです。



↑叡山電鉄出町柳駅ホーム左の三鉄カラー車両には「祝三陸鉄道・リアス線全線運航再開・2020/3/20」のプレート。右は観光列車「ひえい」



↑終点鞍馬駅



↑「東光坊跡」に建つ義経公供養塔



↑新型コロナウイルス感染予防のため、使用できません



↑義経の「背比べ石」。今年は背比べ石を越しました



↑「木の根道」義経が兵法修行をしたと伝えられる



↑貴船口「奥ノ院橋」。貴船神社まで100mの標識

桜はつぼみも咲き始めも散り際も美しい花ですが、天候次第ではその美しさを愛でる時間も限られてしまします。能「鞍馬天狗」の詞章のなかでも「今日見ずは悔しからまし花盛り、咲きも残らず散りもはじめず」とあります。花の美しさは人の心を奪い、惑わせ、誘います。能「鞍馬天狗」のシテ・山伏は桜の花と義経の美しさを重ね、師として育み、父のように愛おしんだのではないのでしょうか。

孫の明幸は、「鞍馬天狗」の義経役で長刀の型を覚えられると楽しみにしていただけに、今回の廣田鑑賞会の中止はいつもに増して心残りだったようです。桜の花を惜しむように、子方の時期もあつというまに終わります。

ちなみに、庭石で用いられる鞍馬石（石英閃緑石）は、約一億年前、丹波帯の堆積岩中にマグマが貫入してきたそうです。山中には他にも約二億年前の砂岩、石灰岩などを説明する立て札があるので、岩石好きの方には楽しいハイキングコースになると思います。



↑境内の桜が満開の本殿金堂



↑本殿金堂前の金剛床は人気のパワースポット